



四条宮下野集  
本文及び総索引  
久保木哲夫編

笠間索引叢刊 3



## 序

四条宮下野集といっても、和歌ないしは後冷泉院期の文学研究者でない限りは、名も知らない場合がおおい。しかしながら興味深い作品である。私がこの家集をはじめて読んだのは、昭和二十四、五年の頃であり、未熟ながらも、他の一般的な歌集と余りに異なる内容に驚いたのであった。

その後、詳しくこの作品を調べていくと、内容は下野個人の歌集ではなく、作者の意図するところは、四条宮寛子後宮の「めでたくをかしき」日常を記録することにあることに気づいた。いわば後冷泉院期の歌壇を、その中心であった関白頼通庇護下の寛子後宮という場で、刻明に叙述したのがこの集であるといえるのである。その意味からいうと、一条院期文壇の記録とも言える枕草子などと等質のものを持つとも見られよう。

この四条宮下野集の特色は、反面文学作品としての短所ともなっている。すなわち、歌集としては詞書中心であるため散文化されすぎ、また散文的な視点でみると、枕草子にみられるような感覚的な鋭さ、人間の描写もない。この点でそれなりの限界はあるが、描かれた時代が院政期直前の摂関時代最末期にあたるということは注目すべきであろう。いわば転換期の文学と対照する意味において、資料的にも文学的にも、また和歌史的にも国語史的にも、現在より以上に注目研究されてしかるべき作品と考えられる。

本書の著者である久保木哲氏は周知の中古文学の少壮研究者である。氏は昭和二十九年に東京教

育大学を卒業以来、著名な名門高校において国語教育・受験指導に寸暇のない日々を送られた。その間、鈴木一雄氏の研究サークルの一員として研究をおこたらず、その成果は卓抜な論文となり、都留文科大学における学生の研究活動に結実している。氏と私とは、鈴木一雄氏をとおして学生時代からのつきあいである。この十数年おおくの論文を拝見しているが、くしくも和歌と散文との接点に研究視点をあてておられる。いつこの四条宮下野集に手を染めるのかと注目していたが、この度、校訂本文にもとづく索引を出版されることになった。

下野集の本文は、書陵部蔵の近世初期写一本のみが研究可能であり、誤写誤読と推定される箇所も少くない。冷泉家蔵のその親本は見ることに出来ない現状では、解釈による本文校訂もやむを得ない。その点に氏の苦心があったろうし、この集校訂の適任者としては、久保木氏において他には求めにくいと考えられる。またそれにもとづく語句索引は、作品の成立時代を考えると、国語史的にも和歌史的にも、われわれが多大の恩恵をうけるものであることを確信している。

第三者の業績に対して、序文的なものを記すほど、私は大家でもなければ年輩者でもない。ただ、対象とされた作品と私、また著者久保木氏と私、そのいずれもが因縁が深い。その理由だけで、あえて蕪辭をつらねたわけである。

昭和四十五年十一月

橋本 不美男

## 凡 例

、本書は、「四条宮下野集」の本文編と索引編とから成り、本文編には、底本としたものの全文の影印版を、索引編には、一般の語彙索引とは別に、和歌(初句・四句)索引、登場人物索引を付した。

、底文には宮内庁書陵部蔵「四条宮下野集」を用いた。書陵部蔵本は、現在われわれが閲覧し得る唯一の伝本であり(他に一本、冷泉家に蔵せられているよしである)、まだ全く注釈がほどこされていない関係もあって、本文の作製には、特に力を入れた。

、本文ならびに索引を作製するにあたっての諸事項は、およそ次のとおりである。

### 【本文編】

1、章段は私に立てた。

2、本文だけでひとつの解釈が示せるように留意した。従ってなるべく多くの漢字をあてた。ただその場合原本での漢字表記と区別するために、あらたにあてた漢字についてはルビをほどこし、後の索引作製にあたって、読みが私意によらないものであることを示した。

3、濁点、句読点、会話符などを適宜ほどこした。また送り仮名や、原本でのあて字は、通常のものに改めた。

4、仮名づかいは、いわゆる歴史的仮名づかに改めた。ただ、「せいろう(清涼)殿」、「せうさう(少將)」「うちのごぜ(内御前)」などのような、拗音、撥音、促音などは、可能なかぎり原本のままとした。

5、「つゝ」「つれく」などは、「つつ」「つれづれ」などとした。ただし漢字が重なる場合は、たとえば「人々」

などのようにした。

6、判読不能な部分や、解釈が不可能な箇所は、注印を付して、その旨を頭注に示した。みだりに本文を改めることはしなかった。語法上あきらかにおかしいと思われる部分は、(ママ)としたところもある。

7、和歌における懸詞は、ひとつひとつ頭注欄に示した。索引でどちらからもひけるようにするためだが、認定はあくまでも私見によった。

8、本書の性格上、右のように、頭注は語の認定に必要なもののみにとどめた。

9、影印版によって本文を確認する場合の便を考慮し、本文中に、底本の帖数を、一オ、二ウ、などのごとく示した。

10、底本の原形態は鳥の子、列帖装。一六・三×一六・九センチメートルの小型枳形本で、影印版はそれを縮刷したものである。

## 【索引編】

### 〔語彙索引〕

1、語の認定はなるべく普通の説に従った。配列の方法なども、既刊の諸索引とあまり大きな違いはない。

2、原本での漢字表記語は、適当と思われる読みのもとに分類したが、「御」の場合は、「み」と読むべきものも含めて、すべて一応「おはん」の項目のところにまとめた。

3、漢数字の場合は、「二三人(にさんにん)」「九月(くぐわつ)」などのごとく、原則として音よみとした。ただし「一日(ついたち)」から「十日(とうか)」までは訓よみとした。「一日」を「ひとひ」とよんだ例が一か所ある。

4、項目としてかかげたものは原則として単語であるが、「いせのうみ(伊勢海)」などや、「いひかく(言掛)」など

の複合語も認めた。その場合、下部の構成成分もすべて別に一項目としてかかげ、参考すべき複合語を cf の符号のもとに示した。

5、助動詞「なり」の連用形「に」は、助詞「に」、あるいは「にて」との区別が容易につけがたく、いずれも「に」、ならびに「にて」の項目にまとめて示した。

6、「なかりせば」などの「せ」は、一応助動詞「き」の未然形として処理した。

7、活用語の場合は、各活用形別に配列したが、同一単語内に同じ形の二つの活用形がある時は（たとえば四段活用の終止形と連体形）、活用表で上にくる活用形の小見出しを——ではじめ、下にくる活用形の小見出しを——ではじめて区別した。

8、「いく」と「ゆく」のように、同じ語で他の項目をも参照すべき場合は、↓の符合で、その項目を示した。

9、接頭語「御」や接尾語「ども」などのついた語は、その該当語の箇所に小項目としてかかげた。

10、「この」「その」「せたまふ」「させおはします」などのように、特に他の語と結びついて用いられることが多い場合は、それぞれ「こ」「そ」「たまふ」「おはします」などの項に、別に小項目とし、（ ）を付してかかげた。ただその場合、語の意味内容には立入っていないので、「す」「さす」が使役であるか、尊敬を示すものであるかは区別していない。

11、語の所在は、ページを漢数字、行を洋数字で示した。ただし歌語の調査などに便ならしむるため、詞書の部分は洋数字を○で囲み、和歌の部分は同じく洋数字を□で囲んで区別した。

12、本文の頭注欄にとりあげられている懸詞や問題の語には、すべて語の所在を示す洋数字の右肩に\*印を付した。

〔和歌索引〕

- 1、作品中にあるすべての和歌ならびに連歌の初句と四句とを分類し、示した。
- 2、所在を示す数字は、本文上に記入した歌の通し番号によった。

〔登場人物索引〕

- 1、作品中に登場する人物はすべて扱った。
- 2、会話の中にのみ登場する人物も扱った。
- 3、帝や四条宮寛子の場合には名称が具体的に示されていなくても、敬語などの使用でそれと分かる場合、所在を示す数字に（ ）を付してかかげた。
- 4、同一人物の場合は、それぞれの名称の違いに関係なく、一か所にまとめてかかげた。その場合、他の名称からも引けるよう配慮した。
- 5、所在は、その登場する章段数で示した。
- 6、なお作者の「下野」は、各章段全部にわたって登場し、詠作している。当然のことのようであるが、この種の家集ではかならずしもそうではないことがあるので、念のため言い添えておく。



四条宮下野集本文及び総索引  
目次

序.....橋本不美男

凡例

本文編.....一

四条宮下野集（影印）.....三

索引編.....三五

語彙索引.....三七

和歌索引.....三八

登場人物索引.....三八

あとがき.....一九一

## ●編者紹介

久保木哲夫 (くぼき てつお)

，東京に生まれる。

昭和29年，東京教育大学文学部卒業。現在，都留文科大学助教授。フェリス学院大学講師。

主要論文：「三条右大臣集の成立と堤中納言兼輔」

(「言語と文芸」第32号)，「平安期におけ

る長歌の意味」(「国文学論考」第6号)，

「大和物語の成立に関する一試論」(「中古

文学」第5号)

しじょうのみやしもつげしゅう ほんもんおよ そくさくいん  
四條宮下野集 本文及び総索引 ●笠間索引叢刊3

昭和45年12月25日初版発行©

¥ 2,700

省 検  
略 印

編者 久保木哲夫

発行者 池田猛雄

発行所 有限会社笠間書院

101 東京都千代田区神田神保町 1-46

電話 03-294-0996・0787 振替東京56002

3381-852003-0924

科学図書印刷・手塚製本所